

「フランス語の学習指針」の策定から アクティブラーニングを考える

Réflexions sur l'apprentissage actif à travers la conception du « Référentiel pour l'enseignement et l'apprentissage du français langue étrangère »

茂木良治、武井由紀、野澤督、菅沼浩子、中野茂、古石篤子、山田仁

MOGI Ryoji, Université Nanzan, mogi@nanzan-u.ac.jp

TAKEI Yuki, Université des langues étrangères de Nagoya, yuki@nufs.ac.jp

NOZAWA Atsushi, Université Keio, nozawa@sfc.keio.ac.jp

SUGANUMA Hiroko, Lycée Assomption, hhkk121suga@tct.zaq.ne.jp

NAKANO Shigeru, Lycée de l'Université Waseda, nakano@waseda.jp

KOISHI Atsuko, Université Keio, akak@sfc.keio.ac.jp

YAMADA Hitoshi, Hachette Japon, jinyamada@hachette-japon.jp

1. はじめに

「フランス語の学習指針」策定研究会は日本フランス語教育学会会員有志の集まりであり、2017年1月末現在で既に6回の会合をもっている。この研究会では、現在の中等・高等教育におけるフランス語教育の課題について検討し、フランス語教育の目的をその理念レベルからとらえ直すことから始めた。そして、現状改善に役立てるため、グローバル化時代の市民性教育の一環としてフランス語教育を位置づけ、中等・高等教育における学習目標とコミュニケーション能力指標を明記し、学習活動例なども盛り込んだ「フランス語の学習指針（以下、学習指針）」の策定を目指している。

本アトリエでは、前半部分ではアクティブラーニングの定義や理論的背景について触れながら、我々が策定を進めている「学習指針」の掲げる教育理念や特徴について紹介した。後半部分では、「学習指針」で設定しているコミュニケーション能力指標に基づきながら、アクティブラーニングを意識した学習活動を実際に参加者とともにデザインするグループワークを実施した。本稿では、アトリエの流れに沿ってその内容を報告する。

2. 「フランス語の学習指針」プロジェクト

「学習指針」を策定するための前段階として、2013年より以下の3回の勉強会を開催した。

- ・第1回「外国語学習のめやす」勉強会、2013年8月、於慶應義塾大学、
(日本フランス語教育学会&日本ドイツ文学会ドイツ語教育部会)
- ・第2回「外国語学習のめやす」勉強会、2014年1月、於国際文化フォーラム、
(参加教員の言語：独、仏、伊、西)
- ・第3回「フランス語学習の指針づくり」研究会、2014年7月、於慶應義塾大学、
(フランス語の教員)

第1回は国際文化フォーラムが開発した韓国語・中国語の中等教育向けの指標である「外国語学習のめやす」について、第2回は第二外国語としてのスペイン語向けの指標である「スぺ

イン語学習のめやす」について、それぞれの開発者をお招きし、講演していただいた。第3回はフランス語教員のみ集まり、フランス語における指針の必要性の有無や可能性などについて中等・高等教育の教員で議論を交わした。2016年4月から今回のアトリエの発表者であるコアメンバー7名が集まり、「フランス語の学習指針」策定研究会を立ち上げ、2016年度に計6回の研究会を開催し、「学習指針」の策定を具体的に進めている。

3. 「フランス語の学習指針」の特徴

次の3点を方針とし、「学習指針」の策定作業を進めている。

- ・フランス語教育の現在の問題点の打開策になるようなもの
- ・あくまで参照対象であり活用を強くない指標
- ・外国語を学ぶ意義や市民性教育を重視したもの

これらの方針に基づきながら、現時点（2017年3月時点）では、設定したテーマに合うコミュニケーション能力指標を開発している段階にある。その指標は下記のような特徴をもつものとなっている。

- ① CEFR（CECR）との対応を考慮しつつ、具体的な can-do 記述文を盛り込んだコミュニケーション能力指標を提示する。
- ② 16のテーマを設定し、テーマに沿ってコミュニケーション能力指標を参照できる。
- ③ テーマ別に想定する場面と3モードのコミュニケーション活動（やり取り、受容、産出）を設定し、特に「やり取り(interaction)」を中心とする指標とする。
- ④ 4～6つのレベルを想定する。レベルの設定は継続検討課題であるが、現段階ではCEFR A1 レベル相当の策定から開始している。
- ⑤ テーマやレベルに応じて必要な「社会文化項目」「文法」「語彙」を作表し、学習活動のデザインを容易にする。

「職業」というテーマのコミュニケーション能力指標を例として下記に紹介する¹。

「学習指針」によるコミュニケーション能力指標案

テーマ13：「職業」	
場面	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活（友人やホストファミリーとの会話の中で） ・教育機関（中学校、高等学校、大学など） ・会社、職場
やりとり	
<ul style="list-style-type: none"> ・現在、どのような職業についているか話しあうことができる。 ・所属する会社名や、仕事の内容について、平易な表現であれば理解し、表現できる。 ・いつ、どこで、どのくらい（何曜日、何時間）働いているのかについて話しあうことができる。 ・仕事の様子（楽しい、大変など）に関する質問や感想について話し合うことができる。 ・将来就きたい職業について話し合うことができる。 	
受容的活動	産出的活動
<ul style="list-style-type: none"> ・母語話者同士が職業について話しているのを聞いて、その人物がどんな職業で、どのような仕事をしているか、平易な表現であれば、理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・申請書などの職業欄に所属と職業名を書くことができる。

¹ このコミュニケーション能力指標は2017年3月時点のものであり、今後変更する可能性がある。

上記のように場面を設定し、CEFR A1 レベルを想定した「職業」に関するコミュニケーション能力指標を作成した。特に、「やりとり」活動を中心に can-do 記述文を設定している。受容的活動や産出的活動は情報が一方のものに限定した活動である。また、この能力記述文に続く形で、想定できる「語彙」「文法項目」などのリストや、日仏文化比較や異文化理解の機会となるような内容を「社会文化項目」として列挙してある。

4. アクティブラーニングと「フランス語の学習指針」の関連性について

我々が策定を進めているこの「学習指針」と、文部科学省により近年推奨されているアクティブラーニングとの関連性について検討した。今回、我々が参照した中央教育審議会教育課程部会から発表された「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（2016）によると、アクティブラーニングにより「主体的・対話的で深い学び」の視点からの学習過程の改善が可能となると述べられている。そこで、本アトリエでは、「学習指針」にもその考え方を取り入れることができるかどうかについて検討した。

「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（2016）では、外国語教育における「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を実現するためにはどうすればいいのかが明記されている。「主体的な学び」とは、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し、身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定することで実現できるとある。この点について、我々の「学習指針」では学習者に身近なテーマ別にコミュニケーション能力指標を設定しているため、学習者の興味・関心にもとづいた学習活動のデザインが可能となる。

次に、「対話的な学び」については、「言語の果たす役割として他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成するという観点を、資質・能力全体を貫く軸として重視する」（*ibid.*, pp.19-20）とある。我々の「学習指針」では「やりとり」を中心としたコミュニケーション活動を基盤としており、この点とも親和性が高い。

最後に、「深い学び」とは、「外国語教育における『見方・考え方』を働かせて思考・判断・表現し、学習内容を深く理解し、学習への動機付け等がされる」（*ibid.*, p.20）学びであると定義されている。「学習指針」では社会文化項目において、文化比較や異文化理解の機会となりうる内容を提示しており、このような内容を盛り込んだ活動を通して、多角的な視点を身につけ、自己表現できるような人材の育成を目指している。

このように「学習指針」が提供するテーマ別コミュニケーション能力指標や社会文化項目を活用することで、「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習活動をデザインすることが容易になるのではないかと考えている。

5. 「フランス語の学習指針」におけるコミュニケーション能力指標を用いた活動案作成

アトリエでは、「主体的・対話的で深い学び」を意識しつつ、「学習指針」のコミュニケーション能力指標を活用し、作成した学習活動案を紹介した。この活動案は、テーマ「職業」の「将来就きたい職業について話し合うことができる」というコミュニケーション能力指標にもとづいたもので、将来の職業という学習者自身が関わる問題を扱うことで「主体的な学び」を促し、職業について他の学習者と話しあうことで「対話的な学び」の機会を形成している。また、フランス語の女性形がない職業名詞について考えたり、将来の職業についてはっきりと表現できなくてフランス人に驚かれたという日本人学生のエピソードを活用し、言語的・社会的な

差異を学習者に意識させ、「深い学び」へと導いている。

学習活動案

タイトル	
将来就きたい職業について話し合おう。	
単元の学習目標	
レベル A1 ・フランス語話者の友達に将来どのような職業につきたいか聞かれたら、答えることができる。 ・また、相手に将来どのような職業につきたいか聞ける。	
(「指針」の) コミュニケーション能力指標	
テーマ	can-do 記述文
13「職業」	・将来就きたい職業について話し合うことができる。
学習シナリオ	
フランス語話者と交流する中で、将来就きたい職業について聞かれました。将来就きたい職業とその理由を述べましょう。また、相手にも将来どのような仕事をしたいのか尋ねましょう。	
学習活動の流れ	
<ul style="list-style-type: none"> ・自身の職業を表現してみる。相手に職業を聞いてみる。[復習] ・知っている職業名詞の男性形・女性形を挙げていく。 [復習] ・女性形がない職業名詞(professeur, médecin, avocat, etc)について考える。日本の状況と比較しながら。[社会文化項目] (深化) ・提示したディアログを練習する。 ・ディアログから将来就きたい職業に関する質問と答えの表現を探す。そして、その理由を示す時に使う表現を探す。 ・表現を探す作業から vouloir + 不定詞の形を理解し、練習する。 ・実際に、就きたい職業は何か真剣に考え、そしてその理由を考える。[個人作業] (主体) ・ペアで将来就きたい職業について話し合う。(ディアログをつくる) [ペアワーク] (対話) ・フランス人の学生と会話し、将来のことをあまり考えていないと言って驚かれた日本人学生のエピソードを使って、日仏の違いについて検討する。[社会文化的] (深化) 	
総括的評価	
<ul style="list-style-type: none"> ・将来就きたい職業について話し合うことができたか。【言語・コミュニケーション】 ・日仏の職業名について深く考察できたか。【文化理解】 ・フランスでは、自分のことや意見をはっきりと表現することを理解し、それに適した行動をとれるか。【文化理解】 	

次に、アトリエでは4名のグループに分かれ、現在作成中の「学習指針」のコミュニケーション能力指標を活用しながら、「主体的・対話的で深い学び」を意識した学習活動案を作成してもらった。

参加者の方々から、「互いに学校生活を語りあおう」、「お昼は何を食べますか」、「お誕生日おめでとう」、「普段の1日の生活についてクラスメートと話そう」、「La vie en famille フランスのファミリーでホームステイするときの会話」、「パーティーに呼ばれちゃった」など、日常生活や学校生活など学習者の身近なトピックで、文化的な比較などを盛り込んだ学習活動が提案された。短時間で多様な学習活動案が提案されたことから、「学習指針」が学習活動をデザインする際の一助となることが確認できた。

学習活動をデザインする際に、「学習指針」のコミュニケーション能力指標の良かった面と足りない面などを参加者に記述してもらった。その記述の一部を以下に紹介する。

<良かった面>

- ・抽象的なテーマから会話内容を具体化させる際に、手軽に作成できるメリットがある。

- ・コミュニケーション能力指標がたくさん示されていて素晴らしい。
- ・コミュニケーション能力指標は十分に配慮されている。

<足りない面>

- ・指標で一定数の候補や事例があるため、それに引っ張られ、より幅広いアイデアを出しにくくさせてしまう。
- ・内容やテーマが十分に絞られていない。
- ・文法内容や語彙の制限をどうするか。

「学習指針」のコミュニケーション能力指標は参照対象であるため、網羅的に作成されている。そのため、上記のコメントが示すように、能力記述文が充実している一方で、絞り切れていないという印象は否めない。また、特に語彙は多岐に渡るため、利用者側である程度絞る必要性が出てくる。指標の活用の仕方などガイドを作成していく必要があるだろう。指標に引っ張られて、幅広いアイデアが出にくいという問題点に関しては、我々も既に認識している問題であり、「学習指針」利用者自身が能力記述文を開発できるように、余白を残すことを検討している。また、参加者のコメントの中に、「アクティブラーニング自体が釈然としない部分がある」という指摘があった。本アトリエでは「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（2016）に沿って、アクティブラーニングを解釈し、実践への反映を試みたが、現段階では活動案を作成したに過ぎない。そのため、今後このような活動を実践し、「主体的・対話的で深い学び」に結びつくものかどうか調査し、あらためて外国語教育におけるアクティブラーニングについて検討する必要があるだろう。

6. まとめ

本アトリエでは、現在我々が作成中の「学習指針」を紹介し、それを参照しながら、アクティブラーニングを意識した学習活動の作成をグループワークで行った。このグループワークを通して、様々なアイデアや意見をいただけたことに対し、参加者の方々にあらためて厚くお礼を申し上げる。

今後は、コミュニケーション能力指標を洗練化し、学習活動案を作成し蓄積していく予定である。また、今回は時間の都合で扱うことができなかったが、学習活動案に合わせた評価ルーブリックの開発なども進めていく。そして、段階的ではあるが、開発した学習活動を実践し、評価することも検討している。今後、それらの成果を関西フランス語教育研究会等で発表していく予定である。

参考文献

中央教育審議会教育課程部会 外国語ワーキンググループ（2016）「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」、

（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377057_1_1.pdf 閲覧日：2017年5月9日）。